

現代イタリア社会学における P.A. ソローキン研究

ー 利他主義研究をめぐるローマ、パドゥヴァ、サレルノでの現地調査を中心にー

吉野浩司

はじめに

現代社会学における P.A. ソローキン (Pitirim Alexandrovich Sorokin, 1889-1968) の研究の中心地は、いうまでもなく彼が活躍したロシアとアメリカである。しかしそれらの国に加えて忘れてならないのがイタリアである。特に2000年以降の研究動向に、そのことが濃厚に示されている。わけても本稿の第3章で紹介する3人の社会学者は、いずれもソローキンからの大きな影響のもと、それぞれの研究成果を蓄積している。それとならんでソローキンの著作をイタリア語に訳そうとする意欲も旺盛で、ことに2000年代に入ってからのもものだけでも2冊を数える (Sorokin, 1941=2000, 1954=2005)。また2008年には、「アガベ運動と社会科学」という会議がイタリアを本拠地とする学術団体 Social One 主催で開かれている。ソローキンを直接的に取り上げた論文以外にも、ソローキンへの言及が、たびたび現れる¹。

さらに社会学者の他にも、ソローキンに興味をもった著述家が、ソローキンを一書にまとめたりしている。『ピティリム・アレクサンドロヴィチ・ソローキンのロシアの魂』(Abbottoni, 2004) もその1冊であろう。研究者ではなく作家の一人が手がけていることは、ソローキンの読者層の広がりを示す証左となるものである。

今回、イタリアの現地調査にあたり、上記の3名 of 社会学者の他、最近、英語によるイタリア社会学史の戦後を描いた著者の一人、マッテオ・ボルトリニ (Matteo Bortolini, 1971-) のもとを訪ねた。ソローキン研究がなぜ今イタリアで盛り上がりを見せつつあるのかを、その背景となる社会学史をふくめて知りたかったからである。その理由をつきとめることで、現代におけるソローキン研究の意義が、よ

1 <http://www.social-one.org/it/download/italiano/seminario-2008/114-testo-seminario-2008/file.html> [2019年2月7日閲覧]。特にマリア・リチア・パグリオネ「ギフトと創造的利他愛—社会学者ピティリム・アレクサンドロヴィチ・ソローキンの思想から始まる反省」(Maria Licia Paglione, *Dono e Amore Creativo Altruistico: Riflessioni a partire dal pensiero del sociologo Pitirim Aleksandrovich Sorokin*) が重要である。

りいっそう明確になるはずである。期間は2018年9月9日から21日、さしあたり足を運んだのは、上記の学者たちが研究拠点を定めているローマ、パドゥヴァ、サレルノの3都市である。本稿は、その調査結果をソローキン研究史としてまとめたものである。

第1章 ソローキンのイタリア体験

1. 「高度文明」への憧れ

現地調査の報告に先立ち、本章ではソローキン本人にとって、イタリアとはどのような存在であったのかを、主として彼の自伝をもとに明らかにしておきたい。自伝『長い旅路』(Sorokin, 1963)によると、ソローキンが初めてイタリアを訪れたのは、1911年のことである。それは数奇な縁によるものであった。その年の1月、サンクトペテルブルク大学に在学中のソローキンの元に、憲兵がやってきた。反ツァーリズム運動により、国家転覆を企てているというのが、その理由である。彼はすでに地方の労働者に向かって演説やオルグ活動を行うなど、社会革命党（エスエル）の黨員としての活動を行っていた。時代背景としては、ちょうど前年の1910年11月20日、ロシアの文豪トルストイ（Лев Николаевич Толстой, 1828-1910）がこの世を去ったばかりである。その死は、帝政ロシアでくすぶっていた反ツァーリズムの機運に着火させる役目を果たしたといわれている。トルストイの死をシンボルとする反ツァーリズム運動が、またたく間にロシア全土にまで広がった。

憲兵がソローキンの元にやってきたのも、ちょうどその頃のことである。取り締りの強化を予期していたソローキンは、証拠となるような資料を周到に隠しておき、また自らも身を潜めていた。ただ、つかまるのは時間の問題であるとも思っていた。そのような折、ソローキンは知人の技術者から、イタリア行きの話を持ちかけられる。その技術者は病気の療養のためにイタリアに行くことになっていた。その付き添いとしてソローキンが指名されたというわけである。最初、固辞していたソローキンであったが、病気の友人と担当の医師のたつての願いということもあり、受け入れた。こうして数奇な縁によるイタリアの最初の旅行は決行された。

それは国際寝台列車による快適な旅であった。友人はイタリア北西部のサンレモのサナトリウムで療養し、ソローキンは近くのホテルで2週間ほど過ごすことになった。ソローキンにとっては、これが思いがけずも最初の西欧体験であり、その体験が「高度文明」諸国の第一印象を形作った。ソローキンが後に伝記のなかで語っているように、イタリアの町は都市も田舎もすべて魅力的で、優れたもののように

感じられた。ニースやモンテカルロにも足を運んだこと、カジノで勝ったことなどを懐かしく回想している (Sorokin, 1963: 81-83)。

2. 「エリートの周流」

さらにもう1つ、ソローキンとイタリア社会学との因縁を語る上で忘れてならないのは、いわゆる「エリートの周流」理論との関係であろう。1916年12月、第一次大戦のさなか、修士論文『罪と厳罰 (*Преступление и кара*)』の口頭試問の準備をしていたソローキンが、イタリアで出版されたばかりのパレートの『一般社会学大綱』(Pareto, 1916)を、ペテルブルク大学図書館で見つけ出した。この本との出会いが、彼の社会学の体系に大きく影響を与えているのは間違いない (Sorokin, 1963: 88)。



1960年にメキシコで開催された国際社会学会議 (International Congress of Sociology)。サスカチュワン大学図書館ソローキン文庫収蔵の写真。左より3番目がソローキン、その右隣にL. ヴィーゼ、ジニ、ヴィーゼ婦人が並んでいる。

例えばパレートのエリートの周流理論はソローキンによって『社会移動』(Sorokin, 1927)として実証的に展開されているほか、理論としても『現代社会学理論』(Sorokin, 1928: 37-62)は、英語圏におけるパレート研究のさきがけとなっている。

また後に触れる統計学者C. ジニ (Corrado Gini, 1884-1965)も、他面、人口周流論者としての側面をもっている。ソローキンとジニは1930年代以降、私信を取り交わすなど、良好な友好関係を築いている。カナダのサスカチュワン大学のソローキン文庫に残されている往復書簡の中には、「社会的代謝 (social metabolism)」に関する論文を書いてほしいとの手紙 (1950年3月6日付)をジニがソローキン宛に書き送っているものもあり、たいへん興味深い。ソローキンはこの時、利他主義研究に取り掛かっていたため、すでに発表している『社会移動』での主張を焼きなおすこと以外に、何ら新たな議論を展開することはできない、との理由で断っている (1950年3月25日付)。ただし、二人の間柄は、第二次世界大戦をはさんで、最晩年に至るまで続いている。

3. 芸術の社会学

そうした社会学史上の関心とともに、今回の現地調査で、ぜひとも自分の目で実物ともども確かめておきたいと思ったものがある。それが、ソローキンとイタリア芸術の関係である。ローマには、数々の歴史的な文化遺産、芸術作品が残されている。ソローキンの記念碑的労作となった大著『社会的・文化的動学』（Sorokin, 1937-1941）は、第1巻第1部で方法論を書き終えた後、ただちに第2部「芸術における観念型、理想型、感覚型の波動」に取りかかっている。世界の文化史を考察するこの第2部には、数多くの芸術作品が、統計とともに、図版入りで紹介、分析されている。つまりソローキンは、自らの分析概念を、そうした芸術作品によって応用しようと試みているのである。なかでも筆者の心に残っていたのが、バチカンの聖ペテロ大聖堂に所蔵されている「ピエタ」と、古代ローマ帝国の専制君主の巨像である。この2つは、ソローキンの芸術社会学を考える上では、決して見落とすわけにはいかない作品である。これらの芸術作品が、まぎれもなくソローキンの方法論の根幹と深く関わっているからである。

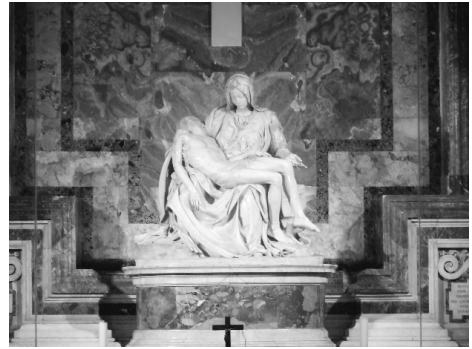
そのことについて、簡単に説明しておこう。人間の意識と行動には、宗教的・精神的なものと、即物的・肉体的なものがある。ソローキンは前者を強調する態度を「観念的文化心性（Ideational Cultural Mentality）」、後者を強調する態度を「感覚的文化心性（Sensate Cultural Mentality）」と名づけ、それらを『社会的・文化的動学』のなかで自らの分析用具として駆使している。そのことと、巨頭およびピエタとの間には、どのように関係するのか。確かに著作で用いられている図版を見ても、それなりに訴えかけてくるものはある。しかし、大きさや質感がいまひとつ伝わりきらないもどかしさがある。今回のイタリア調査を利用して、これらの作品を実際にこの目で確かめてみようというわけである。

右の写真（2019年9月筆者撮影）は、カピトリノー美術館に所蔵されている、コンスタンティヌス1世の巨像である。出入り口の大きさほどもある巨頭（2.5m）のほか、その寸法に合う腕、手のひら、足のパーツが、所せましと横たえられている。古代ローマ皇帝が自らの「偉大さ」を誇るためだけに、より大きく、分かりやすく、目立つように巨像を芸術家に作らせたのである。倒壊する前の立像は、さぞかし圧巻であつたろうことが、容易に想像でき。だが、その威容への驚嘆にとどまらないとこ



ろにこそ、ソローキンの主張の真骨頂はあるといわなければならない。すなわちその古代の時代精神は、実は、現代にも通じるものがある、とソローキンが論じているからである。「感覚的文化心性」という意味では、古代ローマと現代との間に同時代性が見られるというのである。いわれてみる確かに現代の広告産業にも、より大きく、より早く、より大量にという精神は行き渡っているのではないだろうか。コンスタンティヌス1世の巨頭を見て、ソローキンはそれと似たものを感じ取ったのである。確かに巨大であるだけに、どことなく虚無感すら感じさせるものがある。それは間違いなく、ビルに掲げられた看板にも、巷にあふれる誇大広告にも似た趣が感じられる。肉体的欲求に引きずり回される人間は、おのれの欲望を極端なまでに肥大化させる。その精神こそ、感覚的文化心性であるとソローキンは看破したのである。

もう1つ、聖ペテロ大聖堂に所蔵されているミケランジェロ (Buonarroti Michelangelo, 1475-1564) の作品「ピエタ」(2019年9月筆者撮影) も、この調査で実見したかった芸術作品である。ピエタ (Pietà) とは「哀れみ」を意味する。十字架からおろされたばかりのキリストと、彼を抱きかかえているマリアの姿をモチーフとした作品



である。図版を見て想像していたものよりも、はるかに小ぶりの像であった。しかしキリストの死に際してのマリアの悲哀もさることながら、不思議な温かみを発してやまないオーラを十分に感じ取ることができた。肉体の死というものが人の終わりではない、ということに雄弁に語りかけているかのようであった。「人はパンのみにて生きるものに非ず」(マタイ：4) という精神が、「観念的文化心性」の象徴だとするソローキンの主張を、心底より納得することができた。

ソローキンにとっての2つのイタリア芸術は、およそ以上のような方法論的な意味をもつものであった。それではイタリア社会学は、どのようにソローキンの仕事をとらえようとしてきたのか。次章では、イタリア社会学史をひもときながら、その問いへの答えを探っていくことにしたい。

第2章 イタリア社会学史

1. 戦前のイタリア社会学とソローキン

これよりイタリア社会学史²を、ごく簡単に振り返っていくことにするわけだが、それに先立ち、前提として確認しておくべきことがある。それはこの国の社会学史の置かれている状況が、戦前と戦後とでは好対照をなしているということである。端的にいうとそれは、輝かしい戦前の歴史と、暗い影をかかえた戦後の歴史とである。

戦前の社会学が、輝かしい歴史を有しているというのは、どういう意味においてであろうか。いうまでもなくG. B. ヴィーコ (Giovanni Battista Vico, 1668-1744) のような、早い時期に現れた社会学者がいることも、それは指している。彼はコントに先駆けて、段階的変動論を展開した学者である (Sorokin, 1941: 411-412)。またそこまでさかのぼらずとも、V. パレート (Vilfredo Pareto, 1848-1923) のように、理論社会学と理論経済学の礎を築いた、間違いなく20世紀を代表する社会 (科) 学者もいる。さらに特殊社会学の部門としては、犯罪社会学や統計的社会学の伝統も、イタリア社会学の特徴であるといっていいただろう。前者の代表としてはロンブローゾ (Cesare Lombroso, 1835-1909)、後者は先述のC. ジニを挙げることができよう。彼らの名前は、日本でもその名が知れ渡っているくらいに、世界的にも著名な学者である。

それならばイタリア国内の社会学において、パレートやジニの系譜が途絶えてしまったように見えるのは、どのような理由からであろうか。「パレート最適 (Paretian optimum)」という用語があるように、経済学者としてのパレートは、それなりに学説が受け継がれている³。また社会学者としても、階級の転換と社会変動を論じた、いわゆる「人口の周流」理論が社会学の共有財産となっている。さらに現代イタリアでは、ジニはもっぱら統計学者として評価されているようである。「ジニ係数 (Gini coefficient)」などは、確かに不朽の発見であろう。加えてパレートと同様に、ジニもまた民族の周流を考察の対象としていた、幅広い視野をもつ社会学者であった。

そうした彼らの輝かしい業績と、彼らの系譜が、戦後まで受け継がれなかったの

2 戦後の社会学に関しては、後述のボルトリーニらの著作によっている (Cossu, Bortolini, 2017)。戦前のイタリア社会学に関しては (新明, 1936,1951, 姫岡,1975, 松嶋, 1975) などを参照した。

3 マフェオ・パンタレオーニ (Maffeo Pantaleoni, 1857-1924) は、パレートの学統を受け継ぐ経済学者である。これについては (松嶋, 1996) を参照のこと。

は、いうまでもなく、ファシズムと大きく関わっている。戦間期に、これら社会学の雄たちが、こぞってファシズムに加担したことが、戦後に暗い影を落としている原因を作っているのである⁴。

2. イタリア社会学の戦後

戦後の社会学は、知名度という点では、戦前に比肩するような学者は少ないといわざるを得ない。唯一、フランコ・フェラロッティ (Franco Ferrarotti, 1926-現在) が批判社会学の風潮を支える役目をはたした。その影響力は社会的にも強いものがあるとはいえ、それでもやはり戦前ほどの学術的威信はないといわなければならない。こうした戦後の状況を、主としてアンドレア・コッスとマッテオ・ボルトリニによる近著『イタリア社会学1945年～2010年』(Cossu, Bortolini, 2017)を元に、これよりたどっていこう。

社会学に限らず戦前のイタリアの社会科学には、全般的に上述のような不幸な歴史があった。政治学はファシストに加担する学問だと認定され、統計学は植民地主義の手先だとされた。なかでも社会科学で弱い立場にあった社会学は、そうした批判にもっとも強くさらされた学問の1つであった。

学問の外からの批判としては、例えばイタリア共産主義を支持する、いわゆる「有機的知識人 (intellettuale organico)」らによるものが挙げられよう。有機的知識人とは、旧来の知識人に対立する概念で、実践的な活動を行う知識人のことを意味する。グラムシ (Antonio Gramsci, 1891-1937) がその象徴的な人物である。社会学の教養主義ないし非実践的態度に対して、有機的知識人は批判の矛先を向ける。

あるいはまた学問内部からの批判もあった。それは大学の側からの規制・圧力という形で、社会学者の活動が制限されていた。ファシズムへの加担という負の遺産を抱えていた社会学は、こうして戦後の苦境を味わうこととなった。そのような状況のなかで、社会学を学んだ者たちは、自らの活路を、様々な研究センター、出版社、社会福祉の学校などに求めなければならなかった。

イタリア社会学に再出発の兆しが現れるのは、1951年、学術雑誌『クアデルニ・ソチオロジヤ (Quaderni di sociologia)』が創刊されるあたりであろうか。主たる編集者は、上記のフェラロッティと彼の指導教官であった哲学者ニコラ・アッパニャーノ (Nicola Abbagnano, 1901-1990) によるものである。この雑誌が、その後10年間にわたり社会学を牽引したとっていいだろう。ディアナ・ピント (Diana

4 ファシズムとジニの関係については (Prévost, 2009)、パレートについては (松嶋, 1975, 1985) を参照のこと。

Pinto1949-) はイタリア社会学を振り返り、1950年から56年までを社会学の発見の時代、その後を社会学が文化的中心となる時代だと特徴づけた (Pinto, 1981)。

むろん大学で社会学を学んだ者の中には多くの有能な人材がふくまれており、多様な組織での要職を任された。例えば、ミラノ市の国立社会防衛・防御センター、ボローニャ市の文化組織イル・ムリノ（風車）などである (Cossu, Bortolini, 2017: 33-37)。こうした社会活動のなかでも特筆に価するのは、いわゆる「コムニタ運動 (Movimento Comunità)」である。

3. オリベッティのコムニタ運動

イタリアの伝統的なタイプライターの製造会社に「オリベッティ」がある。アドリアノ・オリベッティ (Adriano Olivetti, 1901-1960) は、会社の運営を任されるようになってから、イタリア北部の地方都市イヴレーアに共同体 (コムニタ) の建設を始めた。コムニタでは、まさに住民がシチズンシップを獲得するための手段として社会学が役立てられた。イヴレーア市には「社会関係部」が作られ、そこで若手社会学者に、最新のアメリカ社会学の業績を研究させた。とりわけ労使関係研究の拠点を築いたという意義を有している。それらの研究成果をもとに、コムニタでは、科学的な管理方法、先進的な会社経営が実践された (Cossu, Bortolini, 2017: 37-39)。

こうしたオリベッティの試みは、単に工場内の組織管理というよりも、イヴレーア全体の都市計画という全体構想の下で行われていた。エンパワーメント、科学的な管理法、都市計画など、これらすべての総称として、「コムニタ運動」と名付けられている⁵。ちなみにこのオリベッティの近代都市構想が詰まったイヴレーアは、2018年に世界遺産に登録されている (「20世紀の産業都市イヴレーア」)。

そして何より社会学の歴史にとっては、コムニタ出版の立ち上げが、よりいっそう意義深いことであった。上記のオリベッティやフェラロッチェの著作はもちろん、デュルケーム (Émile Durkheim, 1858-1917) やウェーバー (Max Weber, 1864-1920) の著作をふくむ、社会学の古典といわれる著作を、次々とイタリア語に翻訳しているからである (Cossu, Bortolini, 2017: 54-57)。ほんの一部であるが、下のリストは、コムニタ出版より出された欧米社会学の古典的著作および翻訳である。後述するように、このリストの中には、ソローキンの『社会移動』がふくまれている。

5 <http://www.g-studio.biz/wp-content/uploads/2013/01/2013-Tomioka-conference-on-Ivrea-modern-Heritage.-Japanese.pdf> [2019年1月閲覧]

◆ コムニタ出版から出された社会学の古典（イタリア社会学をふくむ）

ベルグソン『道徳と宗教の二つの源泉』（1947）
マンフォード『都市の文化』（1954）
リップマン『公共哲学』（1957）
ギュルヴィチ『法社会学』（1957）
マンハイム『社会学体系』（1960）
エウジェーニオ・ペンナティ（Eugenio Pennati）『政治社会学の要素』（1961）
フロム『精神分析と宗教』（1961）
ユング『心理学と宗教』（1962）
ルチアーノ・ガッリーノ（Luciano Gallino）『社会学の問題』（1962）
リップマン『世論』（1963）
デユルケーム『社会学的方法基準』（1963）
H.ベッカー『社会と価値』（1963）
スターク『知識社会学』（1963）
ソローキン『社会移動』（1965）
デユルケーム『分業論』（1970）
ボットモア『現代社会の階級』（1970）
リンド『ミドルタウン』（1970-1974）
エッタ・サッコマーニ（Edda Saccomani）『イタリアの社会学的研究』（1973）
パレート『一般社会学提要』（1981）

※ カッコ内の数字はイタリア語版の出版年を意味する

4. 1960年代以降

ふたたびイタリア社会学の戦後史に立ち返ろう。1960年代になると、社会学の学士号を出す大学が作られたり、社会学部ができたり、あるいは政治学部内に社会学専攻科が作られたりするようになった。1960年代後半、イタリア社会学は理論的、経験的、方法論的に、レベルを向上させるよう、順調に動き出していたといえるだろう。この時代の社会学は、自らの地歩を固めるために、理論と応用という、相反する性質を帯びなければならなかった。またフランクフルト学派が大々的に紹介され、批判社会学が新たな装いをまとったのも、ちょうどこの時期にあたる。

そうしたなか、イタリア社会を揺るがす1つの事件が起きた。それが1968年から1970年代にかけての、いわゆる「赤い旅団（Le Brigate Rosse）」によるテロ活動で

ある。トレント大学で社会学を学んだ卒業生がテロリスト集団「赤の旅団」に加わり、過激な行動を取ったことで、社会学の学生といえればゲリラ部隊の隊員であるかの印象を与えるようになった。

1970年代より、信用を失ってしまった社会学を専門とする若い研究者たちの一部は、国内での活動をあきらめ、世界の社会学者とのネットワークを結ぶようになった。皮肉なことに、その結果、イタリアの若い社会学者たちは、硬直化した国内の学問的世界をはなれることとなる一方、英語による著作活動を積極的に行うようになった。

そしてようやく1980年代に入り、「ノーマル化（normalization）」といえる時代になった。社会学者が正当に評価されるようになったのである。博士課程が整い、福祉や各研究センターで社会学が生かされるようになった。しかし、そうした繁栄もつかの間、1980年代後半からは、しだいに社会学者は単なる「知ったかぶり（tut-tologi）」と揶揄されるようになっていった（Cossu, Bortolini, 2017: 121）。

ごく最近の動向としては、イタリアでは、2004年から2005年まで、全国的な大学教員の研究業績評価がなされ、社会学者はかなり低い結果となった。ASN（イタリアにおける科学資格証明）により、5人に1人が准教授に就けるとされた。そこで明らかとなった事実は、社会学においては北イタリアの大学が、中部・南部イタリアの大学よりも、昇進できる候補者が多かったということである。

社会学者は2010年法の評価基準に反駁を加えた。大学運営や教育はあまり評価されず、単に、海外の学術雑誌に掲載されたり、海外の研究者とのネットワークを構築したりしていることが、高く評価されたからである。イタリア社会学を振り返ることをせずに、世界的に活躍する社会学者の方が高い評価を得るようになっていった。論文数だけを見ると、2010年以降、急激に伸びている。それとともに共著論文の数も増加している。それは2010年に設立されたANVUR（イタリアの大学と研究システムを評価する国際機関）によるところが大きい。ANVURの基準に合わせる研究が増加したということである。

以上のように2010年改革は、イタリア社会学会に大きな影響を与えた。もともと本学会には3つの学閥が大学人事や研究費を管理できる情報交換機関として1983年に設立されたものである。しかしASN調査後は、評価が低く出てしまった社会学会を脱会する者も多かった。特に経済社会学者は、独自に新たな学会を設立するなどした（Cossu, Bortolini, 2017: 123-124）。

第3章 イタリアにおけるソローキン研究

1. 著作の翻訳とその解説文

上述のように、戦後のイタリア社会学の置かれた立場には、たいへん厳しいものがある。また社会学の外部でなされる社会的評価にも浮き沈みがある。そのような状況を背景に、いったいソローキンはイタリア社会学のなかでどのように受容されてきたのであろうか。その歴史を振り返るのが、本章の課題である。

これより紹介するのは、イタリアにおけるソローキンの著作の翻訳、それから1990年に出された雑誌『ソシオロギア』におけるソローキン特集である。ソローキンのように著作の多い学者の場合、どのような本がいつ訳されたのか、あるいはどの本が訳されなかったのか、を考えることで、その国のソローキン評価の一端を垣間見ることができるだろう。イタリアでは、これまでに6冊の著作が訳されている。古い順に並べると、それは下記のとおりである。

◆著作のイタリア語訳⁶

- [1] 『社会移動』(1927=1965) *La mobilità sociale*. Milano: Edizioni di Comunità.
※ 訳者はGiana Petronio Andreatta と Alessandro Cavalli。
- [2] 『現代社会学の流行と弱点』(1956=1965) *Mode e utopie nella sociologia moderna e scienze collegate*. Firenze: Editrice Universitaria Barbera. ※ 翻訳はMaria Luisa Martelli。
- [3] 『現代社会学理論』(1928=1974) *Storia delle teorie sociologiche*, vol. II, Città Nuova, Roma.
- [4] 『縮刷版 社会的・文化的動学』(1953=1975、再版2017) *La dinamica sociale e culturale*, Torino: Utet. ※ 翻訳はCarlo Marletti。
- [5] 『現代の危機』(1941=2000) *La crisi del nostro tempo*. Bologna: Casalecchio di Reno.
- [6] 『愛の方法と力』(1954=2005) *Il potere dell'amore*. Roma: Città Nuova.

以下では、これらの著作のうち特に [1] [2] [3] [5] に限定し、それぞれの解説文として寄せられている序文に着目したい。イタリアにおいてソローキンがどのような扱いがなされたのかを知る、よい資料となるはずである。

6 邦訳書名については、混乱を避けるため、イタリア語からの直訳ではなく、原典タイトルを翻訳した。

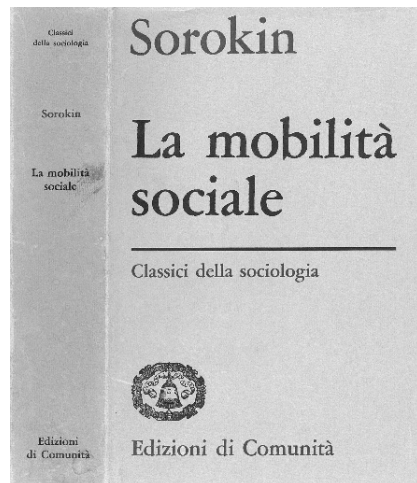
なお、これより要約に取り掛かろうとしている、イタリア語で書かれた序文ならびに雑誌記事の要約については、パドゥヴァ大学のボルトリーニの助力に全面的に依拠している。2018年8月にパドゥヴァ大学でイタリア社会学史に関する聞き取り調査を行った際に、彼が口頭で英訳してくれたものを日本語に変換したものである。当日は、図書館に所蔵されているソローキンの著作のイタリア語訳を借り出して、一点一点、手に取り翻訳・解説してくれた。

『社会移動』（Sorokin, 1927=1965）[1]

本書には、パガニ（Angelo Pagani, 1918-1972）が序文を書いている。訳者は彼の弟子カバリ（Alessandro Cavalli, 1939）である。パガニは労働、経済生産、労働組合、産業化を研究する当時のイタリアを代表する社会学者である。序文では次のような内容が書かれている。ソローキンが1947年に出版した『社会・文化・パーソナリティ』は、彼の統合主義の立場を良く示すものである。ソローキンは多作であったが、なかでも本訳書が一番重要で、多くの社会学者が認めている。社会移動という言葉と概念、そして理論を構築した。社会学と社会移動研究に多大なる寄与を行った。特に進化、発展、平等、そして生活水準について研究している。ソローキンは西洋に批判的になりすぎているところがあるものの、グローバルなビジョンにかけては並外れたものがある。また科学的にも優れている。

ただパガニにはソローキンに対するいくつかの不満点もあった。技術が進むと平等になるというソローキンの考え方は誤りであるとパガニは自らの主張を添えている。またこの国にも、同じような発展が待っているとするところにも、ソローキンの読み違いがあった。さらに、たとえある会社の社長から別の会社の社長へと職場を移したからといって、それがただちに水平移動となるわけではない。会社組織を個別に考えたときに、ある意味ではそれが社会的地位の上昇ないし下降という垂直移動である場合も

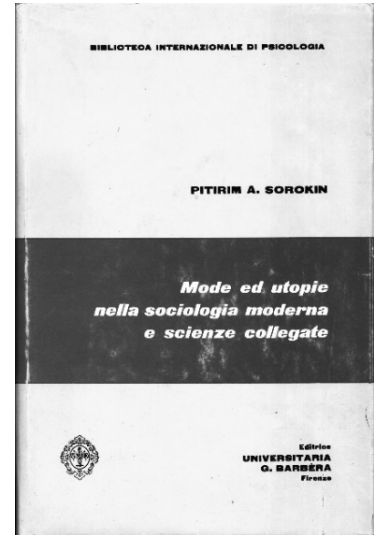
あること。そして最後に、社会にぽっかりと開いた空洞のなかに、余った人口が埋まっていくという理論、すなわち社会的真空の理論は、あまりにもイデオロギー的だとしてパガニは退けている。ソローキンは社会移動が社会組織を壊すことから否定的にとらえられているふしがある。しかしそれは保守思想につながるとして、パ



ガニはその考え方を批判している。

『現代社会学の流行と弱点』(Sorokin, 1956=1965) [2]

教育者のデ・ジアチント (Sergio De Giacinto, 1921-1989) が解説文を書いている。最初にソローキンの小伝を記した上で、本書を次のように評価している。まず博覧強記で、80名もの学者を扱っている。特に歴史哲学が大事だとデ・ジアチントは考えている。社会学者ソローキンはしばしば哲学者風だといって批判されることが多いが、彼自身、歴史哲学を書こうとはしなかった。そして人間研究の探求方法のパイオニアとして重要であり、すべての人文学読者にとっての必読書であるという言葉で、デ・ジアチントはこの序文を結んでいる⁷。



『現代社会学理論』(Sorokin, 1928=1974) [3]

社会学者トマゾ・ソルジ (Tommaso Sorgi, 1921-2018) が序文を寄せている。ソローキンはフランスおよびアメリカで著名な学者であるが、イタリアではあまり知られていない。しかし、それでもイタリアでは、いくつかの翻訳が出ている、とソルジは述べている。

興味深いのは、ソローキンの数少ない理解者の一人としてモスケッティ (Andrea Mario Moschetti) の名前を挙げていることであろう。モスケッティの著作である『カテゴリーとしての統一体』(Moschetti, 1959) の第2巻は、実質的にソローキンの基礎概念の検討に充てられているとのことである。

ソローキンは、巨大理論家であり、壮大な方法論の持ち主である。また既存の理論に批判的であること、社会現象を分析するパイオニアであること、さらには理論と調査の接合にも積極的に取り組んでいることなどに特徴が現れている。ソローキ

7 これはボルトリーニの個人的意見であるが、このデ・ジアチントの序文を紹介するにあたり、彼はかなり批判的であった。ボルトリーニがいうには、イタリアの学問全般にいえる1つの特徴として、文献至上主義のところがあるという。それは人文学の伝統が強いイタリアの国柄ということもできよう。しかし、博覧強記であるとか、権威ある誰かの主張と同じであることとかを理由に、ある学者や学説を高く評価する傾向にあるのが、イタリアの学問の傾向としてある。社会学は現実に即して評価しなければならないと彼は述べた。ボルトリーニ自身も社会学史を専門 (ロバート・ベラ研究) とする学者であるだけに、厳しい言葉であると心に響いた。

ンは社会学者であるが、哲学にも造詣が深い。後期は社会学の分野から見ると、やや逸脱しているとみなされている。しかしソローキン最大の貢献は、心理学を社会学の基礎にすえようとしたところにある。そのことはオルポート（Gordon Willard Allport, 1897-1967）やマーチンデール（Don Martindale, 1915-1985）らも同一の意見である。そのようにソルジはソローキンを評価している。

イタリアにおいてはフェラロッチェイやパガニが、ソローキンの価値を認めていること。特にパガニは社会移動が最も重要な貢献であると述べていることなどを紹介している。

『現代の危機』（Sorokin, 1941=2000）[5]

本訳書にはカトリックに依拠した保守派の評論家ガムベシヤ（Carlo Gambescia）が序文を寄せている。ソローキンのいう感覚主義の没落という主張に、彼は同調している。ソローキンがモラルを重視したこと、たいへん総合的な視野をもっていたこと、そしてソローキンの時代の危機は、今でも続いていることを、この解説文で述べている。ソローキンの知的背景について



は、啓蒙的で、歴史社会学の傾向が強かったこと、アメリカの社会学者の間では好まれなかったと記している。

この解説文から垣間見えることは、イタリア社会学の特徴の1つとして、人文学の伝統から切り離された、啓蒙的でない社会学は軽視されるきらいがあるということである。その意味で、イタリア社会学とソローキンの社会学には親和性があるといえるかもしれない。

なおこの序文の著者ガムベシヤは、小さな出版社から2002年に『ソローキン読本』（Gambescia, 2002、写真右）という入門書を出している⁸。

2. 『ソチオロジニア (Sociologia)』におけるソローキン特集

続いては、雑誌記事の紹介に移ろう。1990年、社会学雑誌『ソチオロジニア (Sociologia)』第24巻第2・3号において、ソローキン特集号が組まれた。イタリアの

⁸ 『愛の方法と力』（Sorokin, 1954=2005）、縮刷版『社会的・文化的動学』（Sorokin, 1957=1975）のイタリア語訳に関しては未見。解説は他日を期したい。

キリスト教系のストゥルツォ研究所 (Istituto Luigi Sturzo) より出されている雑誌である。寄稿者と論文のタイトルを並べると、下記のとおりである。

目次

- | |
|--|
| Michele Marotta, "Presentazione della tavola rotonda: attualità del pensiero di P. A. Sorokin," [ラウンドテーブルでの発表—P.A.ソローキン思想のアクチュアリティ] p. 5-8. |
| Tommaso Sorgi, "Sorokin e la sociologia dell'amore," [ソローキンと愛の社会学] p. 9-24. |
| Maria Caterina Federici, "P.A. Sorokin e le radici socioculturali del terziario avanzato," [ソローキンと先進第三次産業の社会文化的起源] p. 25-32. |
| Maria Luisa Maniscalco, "Pitirim A. Sorokin e la crisi della modernità," [ソローキンと現代の危機] p. 33-39. |
| Marisa Ferrari Occhionero, "I Contributi di P.A. Sorokin ai Congressi dell'«Institut International de Sociologie»" [「国際社会学」会議への寄与] p. 41-44. |
| M. R. Del Ciello, "Bibliografia di P.A. Sorokin e su Sorokin," [ソローキン関係書誌] p. 45-47. |

この特集は、1989年6月30日に開催された、ソローキンの生誕100年を記念する会議に由来する。雑誌記事は、この時に出された発表原稿をもとに取りまとめられたものである。開会の辞を述べているアルディゴ (Achille Ardigò, 1921-2008) は、カトリック派社会学の重鎮的存在であった。またマロット (Michele Marotta, 1919-2008) は、アカデミーの世界では強力な人物であったという。ソルジはソローキンの『愛の方法と力』の要約を行った上で、哲学者、社会学者としてソローキンを評価している。また彼は、ソローキンをヒューマニスティックな社会学者であるとした。フェデリチの論文は、ソローキンがポスト産業社会のルーツを解明したと前置きした上で、独自のポスト産業社会の議論を展開している。マニスカルコは、近代と現代における社会の危機を理解するために、ソローキンの理論は有効であるとした。ソローキンは破局的な側面を浮き彫りにしている。また近代をめぐるには、パーソンズ (Talcott Parsons, 1902-1979) と対立した。さらに近代をやみくもに批判したわけではなく、ポジティブな側面を提示しようとしたところを評価しうる、とマニスカルコは述べている。例えば現代社会にある、新宗教的ムーブメント、あるいは連帯などにその一端が現れているのではないかと。オッキオネーロは、ソローキ

ンが国際社会学に貢献したと述べている。

3. イタリア社会学史におけるソローキン

それでは、これまで述べてきたイタリア社会学の伝統と、そこで展開されているソローキン研究史を振り返ってみて、その受容の特徴として言えることを、3点に絞って総括しておきたい。すでに何度か触れているように、イタリア社会学の伝統の1つとして、「エリートの周流」理論を挙げることができる。それとソローキンの『社会移動』のイタリア語訳との関係が、第一に述べておきたいことである。広い意味での「エリートの周流」理論は、それこそアリストテレス（Aristotle, BC367-BC347）の政治体制の変化に関する議論にさかのぼることができる。しかしイタリアでの典型例を挙げるとすれば、ヴィーコ、モスカ（Gaetano Mosca, 1858-1941）、パレート、ジニといった系譜をたどることができよう。立ち入っていると、モスカが自説の剽窃だとパレートを批判したことがある⁹。また主張の内容としても、特にジニの「エリート周流」理論などは、イタリア社会学史の研究史のなかで、これまであまり触れられてこなかった。人口学的、統計学的に展開したという意味では、科学的な「エリートの周流」理論を深めているといえるにもかかわらず、である。だがこれらの蓄積は、そのままソローキンの『社会移動』のなかに盛り込まれているといえる。これまで社会移動といえば、地域的な移動や階級的な移動、いわゆる水平移動と垂直移動のことしか論じられてこなかった。しかしソローキンが社会移動の先に政治体制の転換という展望をもっていたことは、先行研究によって見落とされてきた点ではないだろうか。ここでは『社会移動』の増補版には、『社会的・文化的変動論』の1章が加えられていることを、改めて想起しておきたい。ソローキンとイタリア社会学の関係を考えることで見えてくる重要な視点が、まさにここにある。そう考えると、パガニが社会移動の解説文で述べていたような、保守性や移動社会に消極的であったとするソローキン評は、修正の必要があろう。

2つめに指摘しておきたいのは、ソローキンによる社会学史・社会学論のイタリア語訳が出された時代性に触れておきたい。『現代社会学の流行と弱点』という痛烈な現代社会学批判の書が、より重要な著作であるはずの『現代社会学理論』よりも先に訳出されていることは注目に値する。そのことと1960年代の批判社会学の隆盛という時代背景とは、無縁なことではないだろう。戦後イタリア社会学は、ファ

9 ただし、同じような主張をした学者は、モスカ以前にもいた。タルド（Jean - Gabriel de Tarde, 1843-1904）の模倣の法則のなかにも、同種の主張は確認できる。とすると1900年前後に、社会学的な政体変換論が流行したということの方が、むしろ興味深い探求すべき課題ということになるだろう。

シズムに加担した戦前の社会学を批判することで、再建を目指した。しかし他方において、自らの伝統を骨抜きにもした。その空洞を埋めたのがアメリカ社会学であった。しかしその輸入されたアメリカ社会学も、1960年代後半の世界的な社会運動のムーブメントにより、再度、批判を浴びることとなった。その批判の際に用いられたのが、ソローキンであったというわけである。ここにイタリアにおけるソローキン受容の時代性を見出すことができるだろう。

そしてイタリア社会学を語る上でどうしても避けられないこととして第3に述べておきたいことは、ローマ・カトリックとの関係である。現代の危機の原因を、宗教心の低下（世俗化）、倫理観の変質（キリスト教的価値の低下）と見る、イタリアの一部の社会学者が、ソローキンの著作を翻訳し、紹介に努めている。後に政界に進出した、上述のソルジは、その代表といってもいいだろう。彼の2編の論文「P. A.ソローキンの深層社会学」（Sorgi,1985）および「ソローキンと愛の社会学」（Sorgi, 1990）は、そのタイトルからも察せられるように、実質的にソローキンの学説の延長線上にある。惜しくも昨年（2018年4月24日）他界されており、今回の調査で会うことがかなわなかったのは痛恨であった。ソローキンは文明史の動態から導き出された「現代の危機」の根源を、文化的心性の変容によるものにとらえた。ここにローマ・カトリックの立場にたつ現代社会批判と、とりわけソローキン晩年の主張と、主張内容における類縁性を見出すことは容易であろう。

それでは次章では、今回の調査の目玉である、3人の社会学者によるインタビューをふまえて、その著作を紹介することにしたい。

第4章 現代イタリア社会学を代表するソローキン研究者

1. ヴァレリオ・メルロ

最初に取り上げたいのは、ヴァレリオ・メルロ（Valerio Merlo, 1947-）である。彼はローマ・ラ・サピエンツァ大学（Università degli Studi di Roma 'La Sapienza' = 通称「ローマ大学サピエンツァ校」）で社会学を学んだ。その後、長らくローマの大学ルスピオ（Libera Università degli Studi "San Pio V"=LUSPIO）の教授職に就いていた。国立イタリア農村社会学協会のメンバーで、事務局長を務めた経験もある。現在は引退しているが、著述活動を盛んに行っている。専門は土地所有史、社会学、社会政治思想である。メルロは農村社会学に関する現代的なテーマでの2冊の主著を出している。1つは、『緑の社会学－イタリアの農村地域(Sociologia del verde: Lo spazio rurale in Italia)』（1996）、もう1つは、『古代思想における完全

な農民と農業市民（*Contadini perfetti e cittadini agricoltori nel pensiero antico*）』（2003）。農村・農民の研究から出発した彼が、後に利他主義や「善き隣人」に関する社会学的研究にたどり着いていることを考え合わせると、ソローキンと同じような研究経歴をなぞっているように思われる。

以下ではその彼の近著を2冊紹介しておきたい。まずは2011年に刊行された『人間における利他主義の奇跡—P.A. ソローキンの愛の社会学』（Merlo, 2011）である。

【目次】

序—革命憎悪の実践（*pratica*）から利他愛の研究へ—

第一部 人間の利他主義の理論

第1章 荒廃への対処としての利他主義

感覚主義（*sensista*）／社会文化の変動の理論／観念の空間的変動／社会的組織の型の変動／周期的な社会文化の変化の原因／現代的感覚性の危機

第2章 コントの社会的利他主義からソローキンの倫理利他主義へ

社会学的伝統における利他主義／利他現象に関する最近の議論／ソローキンの教訓

第3章 心理社会現象としての利他主義

利他的行為の類型／利他現象の経験的な分析／社会生活における利他現象の役割

第4章 利他的成長モデル

キリスト教の聖者の例／早熟型の利他主義／晩成型の利他主義

第二部 友好学（*Amitology*）としての社会学

第5章 個人的利他主義

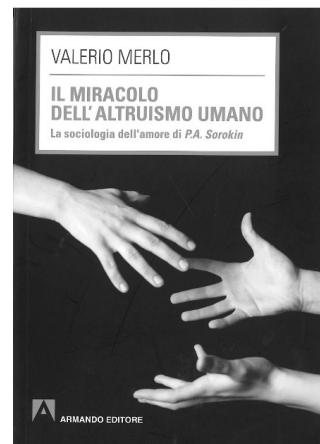
利他のための教育／パーソナリティの利他的変化／利他的成長の修道院モデル

第6章 社会文化の利他主義化

利他的文化の再構築／家族の性革命からの保護／学校における道徳的無力の補助／資本主義への利他主義の付与／利他主義的政府による政治の道徳化

結論 もう1つの社会学

社会学的統合主義／創造的超意識としての社会的行為者／ソローキンの遺産



ソローキンの利他主義研究を一冊まとめた、世界の研究動向に先駆けた著作であるといっているだろう。ソローキンの1950年代以降の課題は、明らかに利他主義社会学の完成にあった。しかしそれは、アメリカ社会学から排除されてしまうきっかけを作った仕事でもあった。それから半世紀以上もの時間をへだてて、現代のロシアやアメリカなどでソローキンの利他主義社会学は再評価されようとしている。メルロのこの著作は、そのなかの重要な一冊に数えられるであろうことは間違いない。

さらにメルロが、このソローキンの利他主義社会学をより一歩深めて、彼なりの発展を示したのが、近著『聖人、英雄、善人—善良な逸脱の社会学』（Merlo, 2017）である。

【目次】

- 第1章 ネガティブな逸脱からポジティブな逸脱へ
- 第2章 見えない人々
- 第3章 価値のある英雄
- 第4章 価値の闘争
- 第5章 愛人の帰宅
- 第6章 独身者よりも自由
- 第7章 それでも若者は教会で結婚する
- 第8章 祖母のように早熟
- 第9章 壊れないカップル
- 第10章 大勢の愚者
- 第11章 若者の逸脱の真偽
- 第12章 巨匠はまだいる
- 第13章 市民 対 過激派



現代社会は社会的、倫理的な規制、規律といったものが、かなりゆるくなっている。しかし、それでもなお、理想的な行動モデルに合致し、法を遵守し、義務を履行する善良な市民がいる。現代社会においては、これらの市民の行為は、誤解を恐れずいうと、一種の「社会的逸脱」といってもいいだろう。しかしそれはポジティブな逸脱である。これまでの社会学者たち、あるいはマス・メディアは、そうした善良な市民のことを無視し続けてきた。上記のように社会規範の力が弱まった時代には、善良な市民のモデルを示すことも、それを推し進めることも、もはやできない。しかし、それにも関わらず善良な行動をとる人々がいる。日々の生活のなかで

出会う多くの「反道徳的」な普通の人々のなかに埋もれているとはいえ、そうした特別な人々はいるのである。偉大な創造的な天才、通常の行動を上回る利他主義の英雄たちは、今なお生きている。

このようにメルロが、利他主義者を「ポジティブな逸脱」というキーワードでくくることを提唱しているのは、卓見であるといえるだろう。というのも「逸脱 (deviance)」という社会学の基礎概念を用いることで、社会学的探究の文脈のなかに利他主義研究を位置づけることが可能となるからである。

2. フォルコ・チマガリ

次に紹介するフォルコ・チマガリ (Folco Cimagalli) は、メルロと同じくローマ・ラ・サピエンツァ大学で社会学を学んだ、主として公共団体、非営利団体等の研究、教育に従事している社会学者である。現職は、ローマにあるルムサ大学 (Università di Roma LUMSA) で、2007年よりここで教鞭を執っている。まずは彼の『ソローキン—社会学の古典のアクチュアリティ』(Cimagalli, 2010) を、ごく簡単に要約しておこう。

ソローキンは社会学の歴史のなかでは稀有な存在である。アメリカ社会学の創設に貢献し、30年以上にわたる論争の的となっている人物でもある。ハーバード社会学科を組織し15年間運営に携わった。またアメリカ社会学協会の会長も務めている。しかし、おそらく時としてソローキンが作品のなかで見せる偏狭さからであろう、彼に対する集団的な排除があったように思われる。こうしてソローキンは「忘れられた古典」の部類に入れられてしまった。彼は巨人ではあるが収まりが悪く、華麗ではあるが評価は定まっていない。しかし当時の彼の考え方や学問的批評を慎重に再検討することは、現代社会とその発展の向かう先をうらなうのに有益である。『ソローキン—社会学の古典のアクチュアリティ』の内容は下記のとおりである。

【目次】

序論

第1章 危機の社会学者ソローキン

旅の途中／近代社会学者／知的履歴／ソローキンとアメリカ社会学

第2章 移動型社会

階層と社会移動：社会学の古典的テーマ／主要な概念／社会移動の特徴／移動の要因／移動の効果

第3章 都市と農村

都市と移動社会／特殊社会学としての農村社会学／「農村都市化」に向かつて

第4章 社会的、歴史的ダイナミクスと危機の社会学

社会文化システム／社会的世界の構造／文化システムの理想型／歴史の変動／社会文化的変化の理論／危機の社会学／社会と災害

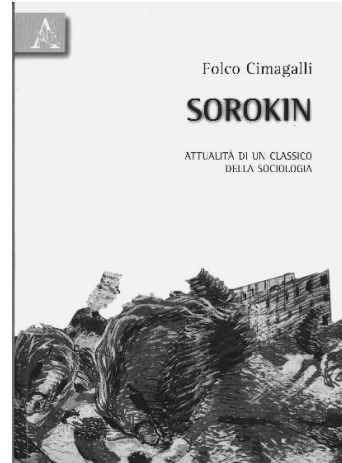
第5章 人と統合社会学

人と社会学／統合社会学／自我の構造／人間の統合の方法と概念

第6章 創造的利他主義と社会学的分析

社会学的知識への挑戦／経験的に観察可能な概念か？／概念の次元と特性／愛の生産

結論—古典はいまもはやっているのか？



以上のように、本書はその「忘れられた古典」の概要を、掘り起こそうという意図で書かれている。目次を一瞥してわかるとおり、ソローキンの生涯にわたる学問の軌跡を、年代順に論評したものである。オーソドックスな社会学史的研究といえるだろう。その後の展開としてチマガリは、ソローキンを公共社会学に引き寄せて解釈しようとする論文を発表している (Cimagalli, 2017)。そのことは、上記のソルジ、あるいはロメロの系譜に属する、ローマ・カトリックを背景とするイタリア社会学の1つの伝統のなかから出てきた視点であるといえるだろう。

3. エミリアナ・マンゴーネ

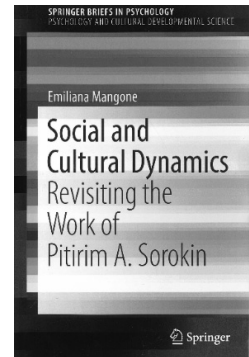
最後に取り上げたいのが、イタリアの中西部にあるサレルノ大学で教鞭をとる、エミリアナ・マンゴーネ (Emiliana Mangone, 1970-) である。彼女は犯罪、健康、医療に関わる社会学的研究を重ねてきた学者である。2016年より地中海学研究交流センター (Mediterranean Knowledge International Centre for Studies and Research) のディレクターも務めている。そうした彼女の研究の背景が、ソローキン社会学を、より現代的な社会問題、現代の社会学説に引き寄せて論じようとする、彼女の研究姿勢となって現れている。

彼女の英語による近著『社会的・文化的動学—ピティリム・A・ソローキンの著

作の再検討』（Mangone, 2018）は、今回の現地調査に出るきっかけの1つとなった著作である。それを携えてのサレルノ大学への訪問となった。まずはこの本の紹介から始めたい。

【目次】

- 第1章 プロローグ—選んだ理由
- 第2章 社会学の境界と他の科学との関係
- 第3章 知の統合理論
- 第4章 社会とその逆説
- 第5章 文化システムと社会問題
- 第6章 パーソナリティと人間の振る舞い
- 第7章 創造的利他愛から責任の倫理まで
- 第8章 エピローグ—統合社会科学に向かって



本書の特徴は3つある。第1に現代社会学との接続を試みていることである。特にソローキンの統合主義を現象学的社会学に接合しようとしているところに特徴を見出していただろう。シュッツ（Alfred Schütz, 1899-1957）や、バーガー（Peter Ludwig Berger, 1929-2017）とルックマン（Thomas Luckmann, 1927-2016）の著作が引き合いに出されている。

第2の特徴は現実社会との接続である。社会学を学問という閉じた世界に放置しておくのではなく、現実の社会問題の理解に資する社会学を目指している。そしてそれは問題の理解にとどまらず、意欲的な社会の変革をも視野に入れている。

そして第3の特徴としていえることは、学際的であること、特に文化心理学との接続を目指しているということである。方法論的な統合というよりも、多元的な対象認識のための学際的アプローチを彼女は推奨している。人間の行動の理解のためには、総合的な認識が必要である、とマンゴーネは筆者に語ってくれた。人文科学や社会科学は協働しあわなければならないというのが、彼女の根本的な立場であるといえるだろう。

1960年代初頭に流行したパーソンズの学際的アプローチがある。彼は社会学を経済学、心理学、政治学、人類学などを、理論的に統合しようとした。そこで、パーソンズについてマンゴーネの立場を聞いてみた。彼女の総合的な認識の方法と同じなのかどうか。そのことを確かめたかったからである。彼女は即座に否定した。パー

ソーンズの目的は理論の統合にあった。対象をその統一理論の枠組みに押し込もうとした。それなど人間と人間が作る社会現象を、過度に単純化してしまう恐れがある。人間の無限の可能性を読み解かなければならない。これはソローキンとパーソンズの対立の根源ともとれる、明快な答えであった。

さらにマンゴーネには、もう1冊ソローキン社会学の現代的展開に関する本がある。前掲書と同じく2018年に出版された『ソローキンの「災難」から「再生」へー災害研究のための統合社会学』。目次は、下記のとおりである。

【目次】

はじめにーソローキンと災害

第1部 人類が必要とする統合社会学

第1章 ソローキンー社会学および統合社会学

第2章 社会学およびその他の科学

第2部 災害、再生、未来

第3章 ソローキンの災難 (calamità) から現代の災害まで

第4章 未来は可能か

結論ー災害研究と社会科学



ソローキンの社会学でなされた、災害の影響の多様性と分極化の法則とが、現在のどの程度、有効であるのか。災害の影響を受けた社会では当然ながら、緊急事態によってもたらされたアクチュアルな問題に取り組むことが、優先課題とされる。しかし、災害後の社会に、新たな秩序を与えようとする際に、集団を特徴づけるダイナミクスを概説することも重要である。本書はそうした問題を取り扱っている。

以上のように、存命中のイタリアの社会学者のなかでは、メルロ、チマグリ、マンゴーネの三人が、現代イタリア社会学におけるソローキン研究の牽引者であると断言できよう。

むすび

さて本稿の課題は、イタリア社会学におけるソローキン受容史に即して、ソローキン研究の現代的意義を明らかにすることにあつた。結論としてまとめるとするならば、2つのことをソローキン研究の現代的意義として示すことができるだろう。

第1の意義は、世俗化社会において新たな価値意識 (倫理) とその実践方法とを

示しうるということである。もはや世界の大宗教に代表される超越的価値というものが力をもたなくなりつつある現代において、それを長期的な文明史の流れにおいて把握しなおし、新たな価値のモデルを過去に探りあて、それを未来に提示する、ということをも可能とする。

第2に示しうることは、社会学史的関心から見た意義である。『社会移動』は古代から現代までの人々の移動により、社会変動を説明しようとするものであった。続く『社会的・文化的動学』では、その探求の規模が、世界文明史にまで拡張され、しかもそれを人々の価値意識の変容という観点から説明されている。その結論が、現代社会における利他主義の重要性の指摘であった。『愛の方法と力』に代表されるソローキンの晩年の研究課題は、利他主義の構造と機能そして利他主義にいたるまでの道を解明することにあつた。

以上のイタリア社会学での取り組みに見られたように、現代において仮にソローキンを語る価値があるとすれば、それは利他主義の社会学者ということをおいて他にないということになる。A. コントを例外とすると、社会学においては、ほぼ未踏の分野であったといえよう。そうした未踏の分野へのソローキン研究の筋道をつけてくれたのが、イタリアの社会学者たちであったことは、イタリアがローマ・カトリックの影響力をとどめている国であることと、おそらく無縁なことではあるまい。幾多の試練を乗り越えているイタリア社会学ではあるが、今後のさらなる展開も、ひきつづきソローキン研究者として見届けていかなければならない。

※ ※ ※

ここで卒爾ながら、本稿を柳田芳伸教授退官記念号に寄稿するにあたり、簡単な謝辞を述べることを許していただきたい。筆者は学部時代（1991年入学）にゼミ指導を受けてよりこのかた、柳田先生より長きにわたる指導を受けてきた。このたび退官されるにあたり思い出すことは尽きないが、先生を語る上では何といても古本のことを書き留めておかなければなるまい。

文章の読み書きを教えられる先生なら他に幾人もおられる。しかし本の選び方、買い方を教えられる先生はそう多くいらっしやらないのではないか。柳田先生は、その数少ない一人であられた。「Amazon」や「日本の古書店」など便利なネット販売などの無い時代のこと、古本屋から送られてくる古書目録に目を通して、めぼしい本を探すというやりかたを教わった。それはこんなふう、である。まず先生は古書冊子目録に目を通し、注文された後、わざわざ筆者の研究に必要なものをチェッ

クし、それを手渡ししてくださるのを常とした。古書値は本の価値に通じる。古書目録を通読することで良書の選ぶ眼力を養うことができた。また大学の図書館よりも、柳田先生のプライベートライブラリー（研究室）の方がよほど充実していたので、迷惑を顧みず、足しげく通わせていただいた。先生のニューヨークでのブックハンティングに馳せ参じたこともある。学びはじめの早い時期に、そうした古書指南ができたことは、まことに僥倖であったと今にして思う。

研究者となってからは、その指導の成果を先生にお見せする意味もあり、海外調査でロシアやチェコやイタリアやトルコに行った折には、欠かさず古書店に立ち寄り、これという「逸品」を選び出し、持ち帰り、土産話として先生に供した。本稿で用いたイタリア語版『社会移動』も、このたびの調査旅行の最終日に、執念で入手したものである。読み書きに加えて、それよりもさらに研究者として決定的な、先行する研究書の選定と、その入手方法、そして何より購入の気構えを授かったことは、現在の研究の大きな支えとなっている。

煩わしい公務からも解き放たれ、荘重な古書に囲まれ、心行くまで研究生活を送られる、これからの先生のごことが、喜ばしくもまた羨ましくも感じられる。今後の旺盛な研究活動とその成果を拝見できる機会を心待ちにし、謝辞に代えさせていただく。

欧文献

- Abbottoni, Barbara, 2004 *L'anima russa di Pitirim Aleksandrovich Sorokin*, Bologna: Martina Edizioni.
- Cimagalli, Folco, 2010, *Sorokin: Attualità di un classico della sociologia*, Roma: Aracne.
- , 2017, "Pitirim Sorokin e il ruolo pubblico della sociologia," *Sociologia: Rivista quadrimestrale di Scienze Storiche e Sociali*, n.3, pp.93-101.
- Cossu, Andrea, Bortolini, Matteo, 2017, *Italian Sociology, 1945-2010: An Intellectual and Institutional Profile*, Palgrave Macmillan.
- D'Ambrosio, J. G., Faul, A. C., & Research Fellow. (2014). Love: Through the lens of Pitirim Sorokin. *Analytic Teaching and Philosophical Praxis*, 34(2),
- Ferrarotti, Franco, 1961, "Sorokin, Pitirim Aleksandrovich" *Enciclopedia Italiana - III Appendice*, Istituto della Enciclopedia Italiana fondata da Giovanni Treccani.
- Garzia M. B. C., 1992, "For the history of sociological analysis. A scientific laboratory. The Rivista Italiana di Sociologia of Guido Cavaglieri". Studio introduttivo alla Ristampa della Rivista Italiana di Sociologia 1897-1921, Berlin: Schmidt.
- Gambescia, Carlo, 2000, Introduzione in P.A. Sorokin, *La crisi del nostro tempo*, Casalecchio.
- , 2002, *Invito alla lettura di Sorokin*, Roma: Edizioni Settimo Sigillo.
- Marletti, Carlo A., 1975, "Sorokin e la sociologia della crisi," in P.A. Sorokin, *La dinamica sociale*

- e culturale*, UTET, Torino.
- , 2018, Pitirim A. Sorokin: contributo alla rivisitazione di un classico della sociologia», *Quaderni di Sociologia*, 76, pp.107-126.
- Mangone, Emiliana, 2018a, *Social and Cultural Dynamics: Revisiting the Work of Pitirim A. Sorokin*, Springer.
- , 2018b, *Dalle "calamità" di Sorokin alla "rinascita": La sociologia integrale per lo studio dei disastri*, Milano: FrancoAngeli.
- Moschetti, Andrea Mario, 1959, *L'Unita Come Categoria*, Milano: Marzorati.
- Merlo, Valerio, 2011, *Il miracolo dell'altruismo umano: La sociologia dell'amore di P.A. Sorokin*, Roma: Armando Editore.
- , 2017, *Santi, eroi e brava gente: Sociologia della devianza virtuosa*, Roma: Castelvecchi.
- Paglione, Maria Licia, 2008, Dono e Amore Creativo Altruistico: Riflessioni a partire dal pensiero del sociologo Pitirim Aleksandrovich Sorokin, <http://www.social-one.org/it/download/italiano/seminario-2008/70-paglione-maria-licia/file.html> [2019年3月7日閲覧].
- Palumbo, Mauro, 1984, *Sorokin e la sociologia della mobilità*, Genova: Ecig.
- Pareto, Vilfredo, 1916, *Trattato di sociologia generale*, v. 1, Firenze : G. Barbera (=北川隆吉ほか訳『社会学大綱』青木書店).
- Pinto, Diana, 1981, "Sociology, Politics, and Society in Postwar Italy 1950-1980," *Theory and Society*, Vol. 10, No. 5 (Sep., 1981), pp. 671-705.
- Prévost, Jean-Guy, 2009, *A Total Science: Statistics in Liberal and Fascist Italy*,
- Sewall, G. T., 2017, Sorokin revisited, *The American Conservative*, September-October, pp.42-44.
- Sorgi, Tommaso, 1974, "La sociologia integrale di P.A.Sorokin," Introduzione a P.A. Sorokin: *Storia delle teorie sociologiche*, Roma: Città Nuova.
- , 1985, "La sociologia del profondo in P. A. Sorokin," in *Schemi di sociologia*, Pescara, Libreria dell'Università, n. 5, 7-174
- , 1990, "Sorokin e la sociologia dell'amore," *Sociologia: Rivista di Scienze Sociali dell'Istituto Luigi Sturzo*, XXIV, n.2-3, Roma, pp.9-24.
- Сорокин П. А., 1914 [=2000], "Л. Н. Толстой как философ," *О русской общественной мысли*. СПб.: Алетейя, с.150-166. (=2016、吉野浩司訳、「翻訳 П・А・ソローキン「哲学者としてのЛ・Н・トルストイ」」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』第14巻第1号、pp.53-65).
- Sorokin, Pitirim Arexandlovich., 1925, *The Sociology of Revolution*, J.B. Lippincott.
- , 1927, *Social Mobility*, Harper (= 1965, *La mobilità sociale*. Milano: Edizioni di Comunità).
- , 1928, *Contemporary Sociological Theories*, Harper (= 1974, *Storia delle teorie sociologiche*, vol. II, Città Nuova, Roma.).
- , 1937-1941, *Social and Cultural Dynamics*, American Book Company.
- , 1941, *The Crisis of Our Age: The Social and Cultural Outlook*, Dutton (=2000, *La crisi del nostro tempo*. Bologna: Casalecchio di Reno, =1955, 『現代の危機』日本経済道徳協会).
- , 1947, *Society, Culture, and Personality: Their Structure and Dynamics*, Harper and

- Brothers, 1961, 『社会学の基礎理論—社会・文化・パーソナリティ』 (内田老鶴圃).
- , 1948, *The Reconstruction of Humanity*, Beacon Press, 1951, 『ヒューマニティの再建』 (文藝春秋新社).
- , 1950 [2010], *Altruistic Love: A Study of American Good Neighbors and Christian Saints*, Kessinger Publishing. 1985, 『利他愛—善き隣人と聖者の研究』 (広池学園出版部).
- , 1954 [2002], *The Ways and Power of Love: Types, Factors, and Techniques of Moral Transformation*, Templeton Foundation Pr., (= 2005, *Il potere dell'amore*. Roma: Città Nuova, = 1977, 『若い愛・成熟した愛—比較文化的研究』 広池学園出版部).
- , 1956, *Fads and Foibles in Modern Sociology and Related Sciences*, Henry Regnery (= 1965, *Mode e utopie nella sociologia moderna e scienze collegate*. Firenze: Editrice Universitaria Barbera).
- , 1957a, *Social & Cultural Dynamics: A Study of Change in Major Systems of Art, Truth, Ethics, Law, and Social Relationships*, Porter Sargent Publisher (= 1975, *La dinamica sociale e culturale*, Torino: Utet).
- , 1957b, "Integralism is my philosophy," in Whit Burnett ed, *This is My Philosophy*, New York; Harper & Brothers (= 1961, *L'Integralismo è la mia filosofia*, W. Burnett, a cura di, *Questa è la mia filosofia*, Bompiani Editrice, Milano).
- , 1963, *A Long Journey: The Autobiography of Pitirim A. Sorokin* Rowman & Littlefield Publishers.
- Valsiner, Jaan, *Beyond the Mind: Cultural Dynamics of the Psyche*, Advances in Cultural Psychology: Constructing Human Development.

邦文献

- 伊藤公雄、1983、「イタリア社会学瞥見」『ソシオロジ』第28巻第1号、158-159頁。
- 古城利明、1980、「イタリア」、『現代社会学』(総合労働研究所)、季刊労働法別冊、第6号、214頁。
- 新明正道、1936、『ファシズムの社会観』岩波書店。
- 、1951、『社会学史』有斐閣。
- 中川政樹、1988、「モスカ=パレート論争をめぐる : 政治階級とエリート」『島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)』第22巻第2号、1-15頁。
- 姫岡勤、1975、「イタリア社会学」、阿閉吉男他編『社会学史概論』勁草書房、381-401頁。
- ポルトリーニ、M他、2017、「イタリア社会学」グローバル・ダイアログ第7巻第3号。
- 松嶋敦茂、1975、「パレートとファシズム」『彦根論叢』第175/176号、37-56頁。
- 、1985、『経済から社会へ—パレートの生涯と思想』みすず書房。
- 、1996、『現代経済学史1870~1970—競合的パラダイムの展開』名古屋大学出版会。
- 吉野浩司、2009、『意識と存在の社会学—P.A.ソローキンの統合主義の思想』昭和堂。
- 、2016、「研究動向 / 「長い旅路」のはじまり—ロシア・コミ共和国におけるソローキン研究動向を中心に」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第14巻第1号、71-83頁。
- 、2017a、「寒村トウリヤからサンクト・ペテルブルク大学までの足跡を追って—P. A.

- ソローキン『長い旅路』第2部をめぐる現地調査』『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第15巻第1号、5-22頁.
- 、2017b、「アメリカ社会学会における利他主義セクションの可能性—P.A.ソローキンの統合主義社会学の視点が投げかけるもの」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』第15巻第1号、23-31頁.
- 、2018a、「Π・A・ソローキン「哲学者としてのトルストイ」の社会学的意義—利他主義が必要とされる根拠をめぐる」『社会学史研究』第40号、73-92頁.
- 、2018b、「1920年代の亡命ロシア知識人とチェコスロヴァキア社会学—P.A.ソローキン『長い旅路』第3部をめぐる現地調査」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要』第16巻第1号、53-70頁.